（別表第1）

サービス評価結果表

サービス評価項目

（評価項目の構成）

Ⅰ.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

Ⅱ.家族との支え合い

Ⅲ.地域との支え合い

Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取組み内容をＰＲ!!!

ーサービス向上への３ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人　愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和　3　年　7　月　30　日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	（回答数）	16名	（依頼数）	18名
地域アンケート回答数	8名			

※事業所記入

事業所番号	38932000034
事業所名	グループホームさくらや
（ユニット名）	さくら
記入者（管理者）	
氏　名	森崎　阿里
自己評価作成日	令和　2　年　12　月　11　日

［事業所理念］	［前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果］	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】
我が家のようにゆったり、ほっこり	・利用者の居室を個人の空間と認識し、入室時には配慮をするという意識を職員全体で持つために、全体ミーティングや日々の業務の中で注意喚起を行った。概ねの職員が配慮して行動できるようになった。 ・ケアプランの更新のあった入所者のケアプランは全体ミーティングで共有するようにしており、目標は個人記録の上部に明記している。目標を意識してケアにあたるところまでは改善できていない。 ・利用者の日々の様子を職員で共有するためにフェイスシートを作成し3か月に1度見直しをしているが、有効活用できていない。他の方法を検討しているところ。 ・再アセスメントツールがなかったので介護計画評価表を作成し、再アセスメントに役立てている。 ・運営推進会議を家族に認識してもらうために毎月のさくらや便りに運営推進会議のことを掲載するようにした。	事業所は島内にある唯一のグループホームで、海や山などの豊かな自然に恵まれた場所に位置している。事業所の2階のフロアの窓からは、海の絶景を眺めることができ、利用者や来訪者などを癒してくれる。代表者は全ての職員を信頼し、事業所での利用者の生活を委ねている部分もあり、結果の有無は別にしても職員から出された改善点や要望などには耳を傾けてくれ、安心して利用者の支援をすることができる。職員同士の仲は良く、コミュニケーションも取れていることをあり、職員の離職率も低い。事業所では、利用者を見守りながら自由に外出することができ、訪問調査日には、事業所前の道路を挟んだ場所にあるニワトリ小屋や畑に出かけ、ニワトリの世話や水やり、草引きなどをしている利用者の姿を見ることができた。また、事業所として、今年から介護ソフトを導入してICT化などの業務改善を図り、職員はタブレットを活用して記録している。さらに、週3回、事業所より少し高台にある町のひまわり百年館を活用した「さくらカフェ」を運営し、利用者と一緒に歩いて出かけ、コーヒーやお茶などを飲みながら楽しんでいる。管理者は日々の退社時に職員に声をかけ、どんな小さいことでも聞き、職員は安心して帰宅することもでき、働きやすい職場環境づくりにも努めている。

評 価 結 果 表

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅰ.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	◎	できるだけ、本人がしたいようにできる支援をしている。	◎		◎	日々の生活の中で、職員は利用者から思いや希望、意向を聞いて、把握している。また、思いの把握が難しい利用者には、その時々で違うことを話すこともあって記録に残したり、職員が常に本人の表情や行動などを観察し、察することもある。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	◎	自己表現が難しい方でもその方の表情や仕草からどう感じているかを汲み取るようにしている。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人（家族・親戚・友人等）とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	家族や知人が面会に来た時や、用事があって電話をしたときなどに、入所前の様子などの話を聞くようにしている。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	△	ケアプラン作成時にケアプランに記入して共有するようにしているがケアプラン作成時以外の時にその記録を職員が見ていることはほぼない。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	本人のアウトプットを元にケアが適切かどうかを判断するように努めている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人（家族・親戚・友人等）から聞いている。	○	家族や知人が面会に来た時や、用事があって電話をしたときなどに、入所前の様子などの話を聞くようにしている。			○	入居前に、職員が利用者や家族から、これまでの暮らし方や現状などを聞き、フェイスシートに記載している。島内の利用者は地元に知り合いも多く、散歩時に利用者と職員は友人や知人、もともと住んでいた近隣住民など出会うこともあり、情報を聞くことも多い。さらに、面会時に家族から新たな情報を聞くこともある。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力（わかること・できること・できそうなこと等）等の現状の把握に努めている。	◎	毎月、全体ミーティングで利用者一人ひとりの状況を職員全員で検討している。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	職員それぞれが把握しているし、フェイスシートにも記載するようにしている。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。（身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等）	◎	不安や不安定になっている場合は申し送りや始業、終業時などで職員同士で話し合い要因を検討している。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	◎	把握しているし、職員間で情報の共有もできている。				
3	チームで行うアセスメント（※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む）	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	◎	月一の全体ミーティングで検討しているし、細かいことは毎日の申し送りでも検討している。必要があれば家族にも相談し意見を聞いたりしている。			◎	事業所では、利用者が自宅のように好きな時に自由に外出できるよう支援している。月１回全体ミーティングを実施し、「利用者が事業所を我が家のように、可能な範囲で自由な暮らせているか」などを職員間で話し合うほか、何か問題のある場合には、「事業所内でどういうことが起こっているのか」を初心に戻って、本人視点で検討している。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	◎	提案や改善などは毎日の申し送りのなかで職員同士で検討している。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	◎	申し送りで検討し変更した対応により本人がどのように変化しているかなどは職員全員で観察し次の対応を検討している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	◎	本人の生活や思いに即した計画を作成している。				利用者本人の思いや気持ちを聞くほか、月1回の全体ミーティングにおいて職員間で意見やアイデアを出し合い、管理者や計画担当者を中心に介護計画を作成している。また、重度の利用者には、事業所でなるべく落ち着いて生活が送れることを念頭に置いて、計画作成をしている。さらに、介護計画の作成後には、全体ミーティングなどを活用して、職員に課題や目標、サービス内容などを説明し、周知している。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	◎	日々の申し送りや報告、本人の気持ちを反映してケアプランを作成し、それをもとに家族ともケアについて話し合いプランを決定するようにしている。	○		◎	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	なるべく落ち着いて穏やかに生活できる内容を検討するようにしている。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	家族、地域の支援まで盛り込んだケアプランはあまり作成できていない。				
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	ケアプランを作成したときは全体ミーティングで作成したケアプランを説明しており、短期目標、長期目標は個人記録の上段に明記している。			○	事業所では、今年から介護ソフトを導入してICT化を図り、職員はタブレットを活用して記録している。全体ミーティングの中などの中でよく職員から意見が出され、目標を意識したケアが実践できるように、個人記録の様式を改善している。現在の個人記録には、利用者の「長期目標と短期目標」の記載のほか、「目標について、変わったことなど」を記載する欄もあり、職員は確認しながらその日の気になることを記載している。また、スタッフ日誌にも全体のことを記載と日々の短期目標の評価も実施している。さらに、利用者一人ひとりの発言した言葉や表情などが記録されている。今後は、タブレットの活用に不慣れな職員もいるため、支障とならない程度に使用方法を再度学び、サービス実施記録のチェックなどから始めるなど、徐々にICTを有効活用できることを期待したい。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	毎日、短期目標の達成度を評価している。			○	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子（言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等）や支援した具体的内容を個別に記録している。	◎	個人記録に記録するようにしている。			◎	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	×	それぞれの利用者に応じた対応や気づきは申し送りで共有し実施しているが個別に記録はしていない。			○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	半年に一度は見直しをしている。			◎	入居後まもない利用者の介護計画は、見直し時期を早めることもある。事業所では、介護認定の期間を基本として、介護計画の見直しをしている。計画の見直しには介護計画評価表を作成して、利用者の再アセスメントを実施するほか、フェイスシートを活用し、月1回の全体ミーティングの中で話し合い、利用者の状況を確認している。また、利用者の重度化や相性などにより、ユニットをまたいで居室の変更時のほか、入退院時やターミナル期などの急変時には、現状に即した介護計画の見直しをしている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	月一の全体ミーティングでそれぞれの利用者の状況や希望などを検討している。			◎	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	△	入院やターミナルなどかなり大きな変化が生じた場合のみ定期外の見直しを実施する。			△	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	毎日の申し送りで職員が気づいた問題などの対応は検討している。大きな案件は常勤会議を開催して対応を検討することもある。				日々の朝・昼の申し送りの中で、問題点や気になることを話し合うほか、月1回全体ミーティングを実施している。管理者の一存で決定などができない場合には、正規職員を集めた常勤会議を実施している。また、参加できなかった職員には、全体ミーティングの会議録などを回覧するほか、複雑な内容は、口頭での説明を付け加えている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	◎	ケアの方向性は管理者や施設長が最終的に判断することが多いが、具体的な問題提起や対応、情報共有などはフロアを担当する職員の意見で決めている。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	○	なるべくそうできるように努力している。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	○	会議記録を回覧し、確認したらサインをするようにしている。			◎	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	◎	申し送りを徹底しており、絶対に伝えたい内容は申し送りに加えてメモをはさむようにしている。			◎	日々の朝・昼の申し送りを活用して、確実な情報共有をしている。事業所ではタブレットを活用した記録など、ICT化で共有しやすくなっているものの、年配の職員は活用に不慣れなため、紙ベースのスタッフ日誌とバイタルチェック申し送りの記録を作成するほか、重要事項は1週間ぐらいメモを挟み共有できるようにしている。また、複雑な内容は、口頭で職員への説明もしている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。（利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等）	◎	毎日の申し送りや、終業時の面談などで伝達できるようにしている。	○			

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2)日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にした支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	◎	ドライブや買い物、草抜きなど、それぞれのしたいことをできるように支援している。				利用者が飲み物や誕生日のケーキの種類、その日にしたいことなどを自己決定できるよう、職員は声かけなどの支援をしている。意思表示が難しい利用者には、日頃から職員がよく観察し、選択できる機会を見逃さないように努めるほか、落ち着いて生活が送れるよう取り組んでいる。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。（選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等）	◎	何をしたいか、行きたいか、行きたくないか、どの帽子をかぶりたいかなどそれぞれの意向を聞きながら支援している。			◎	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	◎	基本的に「どうせできない」という考え方に基づいた支援の仕方はしないようにしている。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にした支援を行っている。（起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等）	○	ときどき、職員のペースでケアをしてしまっていることがあるが、概ね利用者のペースに合わせた支援ができている。				
		e	利用者の活き活きした言動や表情（喜び・楽しみ・うるおい等）を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	利用者の表情を観察しながら支援している。			○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	◎	表情や仕草に注意してなるべく良い表情で穏やかに生活できるよう支援している。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にした言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	概ね配慮した言葉がけをしているが、常には難しいときもある。	○	○	○	事業所では月１回研修会を実施し、年１～２回尊厳などをテーマにの取り上げ、職員は学んでいる。全体ミーティングなどを活用して、管理者は、「居室は利用者の家であり、黙って入らないように」などの注意喚起をしていることもあり、職員は居室を大切な場所と認識し、入退出時にはきちんと声かけをすることができている。また、利用者の呼び方は、基本「○○さん」と呼んでいるものの、昔からの馴染みの呼び名で「○○にい」と、家族や本人の了承を得て呼ぶこともある。さらに、職員は利用者へ配慮した声かけや態度が取れることを心がけており、排泄時の呼びかけなど、他の利用者が気づかないようさりげない声かけにも対応するなど、利用者の安心した笑顔が見られることもある。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	○	他の利用者の目を意識した声掛けをするようにしているが、目立たずさりげない言葉がけでは伝わらないこともある。			◎	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮ながら介助を行っている。	◎	できるかぎり配慮して行っている。				
		d	職員は、居室は利用者専有の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	プライバシーの場所だと理解し、配慮して出入りをするように心がけているが、まだ不十分なところもある。			◎	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	研修での啓発もしており、またセルフチェックにおいても職員全体として情報の取り扱いに関する意識は高かった。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	洗濯物を畳んだり、掃除をしたり、食事の下ごしらえをしたり、若い利用者に高齢の利用者の見守りをお願いしたりと出来る範囲で仕事を依頼して役割をもって生活してもらっている。				利用者同士が大きなトラブルにならないよう、職員は相性を見ながら、時にはユニットを超えて利用者の居室を変更する場合もある。よく気のつく利用者が、他の利用者の髭剃りなどを手伝うこともある。また、レクリエーション時に「パズルができない」という利用者に対して、職員が声かけをしても無理な場合でも、他の利用者が言い方を変えて声をかけると、和んだ状態で一緒にすることもあり、職員は利用者から教えられる場面もある。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	◎	お互いができることをして補い助け合いながら生活するように支援している。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。（仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わえる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等）。	◎	それぞれが楽しく過ごせるように人間関係には配慮している。			◎	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	利用者同士で大きなトラブルにならないように、相性などを見極めてユニットを決めている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	○	面会や電話などを通じて関係をなるべく維持できるように配慮をしている。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	把握しているけれど、入所前と同程度の関わりの維持までは至っていない。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	地域行事などに参加したり、買い物に出かけたりして、地域との繋がりが途切れないように配慮している。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	コロナ禍で制限をかけているが、面会できる機会を維持するように努力している。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。（職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない） （※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む）	◎	施設周辺は好きなように出入りができるように家族と話をし、できるかぎりそれぞれの希望に沿った支援をしている。	○	○	◎	コロナ禍以前は、利用者からの要望があれば、島内のほとんどの場所にドライブなどで出かけられるよう支援できていた。現在のコロナ禍においても、事業所周辺を散歩したり、お弁当を持って桜などの花見に出かけたりしている。また、週3回、事業所より少し高台にある町のひまわり百年館を活用した「さくらカフェ」に歩いて出かけ、コーヒーやお茶などを飲みながら利用者と一緒に楽しんでいる。事業所では、日中利用者は職員の見守りもあって自由に外出することができ、訪問調査日には、事業所前の道路を挟んだ場所にあるニワトリ小屋や畑に出かけ、ニワトリの世話や水やり、草引きなどをしている利用者の姿を見ることができた。さらに、車いすを使用している重度の利用者も、職員の手助けで外のカフェに行ったり、ベランダで日光浴をすることができている。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	◎	有償ボランティアの助けを借りて外出の個別対応を柔軟に行っている。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	◎	テラスやカフェなど快適に過ごせる場所をいくつか作り、どの人も戸外に出やすくできるように工夫している。			◎	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	○	島内は希望があれば概ねどこでも連れて行っている。島外は希望どおりには難しいが、機会があれば連れて行ったりもしている。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	認知症の研修をしたり、申し送りや終業時の面談などで行動の原因などを認知症の行動・心理症状の観点から検討したりするようにしている。				月１回実施する研修会などで、職員は認知症のことを理解している。日々の生活の中に、散歩や体操を取り入れてながら、事業所では利用者の心身機能の維持に努めている。また、洗濯物干しや野菜づくり、ニワトリの世話など、できることを利用者は手伝っている。さらに、認知症状が進行しても、食器洗いをしてくれ、放っておく洗剤を流しっぱなしにしてしまう利用者にも、そっと洗う場面だけをセッティングして手伝ってもらうなど、できることをしてもらえるような環境づくりをしている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴（筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等）を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	◎	散歩や口腔体操、全身体操など強制ではないけれど、習慣として取り組めるように工夫をしている。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。（場面づくり、環境づくり等）	◎	家事や野良仕事、包丁研ぎなど、できることはなんでもしてもらうようにしている。	◎		◎	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	◎	それぞれに何かしら役割をもって生活してもらっている。				洗濯物干しやたたみ、草引き、畑仕事、包丁研ぎ、寝る支度など、日々の生活の中で利用者は一人ひとりの役割や出番づくりができている。職員は手伝いなどをしてもらった場合には、必ず利用者に「ありがとう」「助かります」などの感謝の意を伝えている。以前事業所では雑巾づくりをしていたが、昨年からのコロナ禍において、裁縫を活用したマスクづくりを手がけ、小学校の入学祝に贈呈したり、安価で販売したりするなど、地域住民からも喜ばれ、利用者の励みにもつながっている。また、事業所では卵からふ化をさせ、ひよこやニワトリを育てるなど、地域の保育園児が散歩がてらに見学することもあり、楽しみや張り合いが持てるよう支援している。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	◎	できること、役割をたくさん持ってもらい、症状が進んでもできることがなくならないようにしている。	◎	○	◎	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	△	運動会や持久走大会での応援を頑張っている・・・とか？				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	それぞれの好きな服を着てもらったり、好みの美容室に行ける支援をしている。				毎朝、自分で着る服を選び、着替えている利用者も多い。着替えが困難な利用者には、上着をおしゃれにすることで、本人らしさを保てるよう支援している。男性利用者には、入浴時などに声をかけ、自分で髭剃りをしたり、職員が仕上げを手伝ったりしている。中には、よく気のつく利用者が、他の利用者の髭剃りなどを手伝うこともある。また、訪問調査日には、利用者の食べこぼしをさりげなく拾う職員の姿を見ることができた。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	○	それぞれの好きな服を着てもらったり、好みの美容室に行ける支援をしている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	本人の様子や着心地などに配慮して服装などを決めている。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	島外の外出や特別な外出の場合はカチッとした服装になるように支援している。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にしてさりげなくカバーしている。（髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等）	○	髭剃りなど、さりげなく声掛けをしている。	◎	○	◎	
		f	理容･美容は本人の望む店に行けるように努めている。	◎	本人が希望する美容室に予約をして連れて行っている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	◎	重篤な状態であってもデイルームに出てくるときには羽織を選んだり紙を整えたりして出て来られるように配慮している。			◎	
17	食事を楽しむことの できる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	美味しく、安全に食べられるように器や食形態について、利用者の状態を観察しながら考えてくれている。				管理栄養士の資格を持つ管理者が、事前に作成した献立の組み合わせを、利用者の意見を取り入れて変更しながら作成している。地域住民から野菜や魚などの差し入れをもらうこともあり、献立を変更して刺身などを提供することもある。利用者と一緒に不足している野菜などの買い物に出かけ、1階ユニットのキッチンで職員が調理をしている。皿洗いなど、利用者のできることを見つけて一緒に手伝っている。現在、事業所にはアレルギーのある利用者はいない。食器は、地域住民から自宅で眠っている行事用などの物をもらい受けて活用しているほか、麻痺のある利用者には、希望に添って軽量の食器を用意している。また、現在のコロナ禍において、同じ食卓を囲むことを控えているものの、職員は少し離れた場所で利用者の見守りや介助をしながら、利用者と同じ食事を摂ることができている。事業所には比較的元気な利用者が多く、自分自身で食べることのできる利用者も多い。食前には利用者と一緒に口腔体操を行い、利用者は食事時間を心穏やかに待っている。さらに、お弁当を持って花見をしながら食べたり、土用の丑の日にはうなぎを提供したりするなど、利用者が楽しめるような工夫もしている
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともに行っている。	○	できる範囲で利用者とともにしている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	できる範囲で利用者とともにしている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	アレルギーや禁忌食品はキッチンの棚に掲示してある。好き、嫌いはザックリと把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	季節に合わせて献立を変えている。また、献立にないものでも、地域の人や職員が季節の野菜や果物を差し入れてくれると、献立を変更し、その食材を使って調理している。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼･嚥下等の身体機能や便秘･下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。（安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等）	○	食形態に配慮しつつ、食べ方、喫食状況を観察しながらなるべく常食で食べられるように盛り付けや器、調理方法などを工夫している。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	施設っぽさが出ないように普通の食器を使っている。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	原則は職員も利用者と一緒に食卓についてサポートしながら食べるようにしている。			○	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	◎	重度であっても、できる限り、みんなと一緒に食卓を囲めるように配慮している。また、食形態が違うことで、他に利用者から悪く言われたりする場合には席を配慮して嫌な思いをしないようにしている。	◎		◎	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	体重や排便状態、喫食率をモニターし、食べられてない場合は何が原因かを検討するようにしている。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	体重や排便状態、喫食率をモニターしている。暑い時期は特にOS1を毎日作り、こまめに飲むように取り組んでいる。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	△	食事をしながら、献立や味付け、形態などについて話をすることがある。また、そこで出た改善点は管理栄養士に伝えて献立に反映させている。			◎	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	消費期限を確認し、期限内に消費するようにしている。期限が切れているものは必ず破棄している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	理解しており、必ず食後には口腔ケアを行っている。				毎食後、職員が利用者に声をかけ、洗面台で口腔ケアを実施している。定期的に、職員は自分で歯磨きなどをしている利用者を含めて、一人ひとりの口腔内の状況を確認している。日々の歯磨きの実施の有無なども記録している。また、月1回、有償ボランティアの歯科衛生士に来てもらい、利用者の口腔内の点検をしてもらい、問題のある場合には歯科医の受診につなげている。さらに、歯科医の受診時には、利用者の日々のモニタリング表を提示して、アドバイスを受けている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況（虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等）について把握している。	◎	月に一度、歯科衛生士の点検を受けている。			◎	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	◎	月に一度、歯科衛生士の点検を受けている。問題がある場合には指導を受けたり、歯科受診をしたりしている。また気になることがあれば歯科衛生士に相談もしている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	必ず食後に口腔ケアを行っている。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないよう、口腔の清潔を日常的に支援している。（歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等）	◎	それぞれの能力に応じて、声掛け、チェック、仕上げ磨き、全介助などの支援をしている。			◎	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	◎	月に一度、歯科衛生士の点検を受けている。必要時は歯科医を受診している。また、月に一度、利用者の状態の記録を歯科医師に渡して情報共有をしている。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ（紙パンツ・パッドを含む）の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	◎	理解しており、なるべく、布パンツで過ごせるように支援の工夫をしている。				事業所では、トイレで排泄できることを基本として、声かけや誘導をしながら、利用者が可能な範囲で布パンツで過ごせるよう支援している。コロナ禍以前には、松山にある県在宅介護研修センターの外部研修に参加し、職員はおむつのあて方などを学んでいる。中には、紙パンツを使用している利用者もおり、適切な排泄用品を職員間で話し合い、家族に確認のうえ使用している。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	理解しているが、改善することができないでいる事例も多い。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。（間隔、量、排尿・排便の兆候等）	◎	理解して支援できている。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ（紙パンツ・パッドを含む）使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々の状態にあった支援を行っている。	◎	状態に合わせて、職員間で頻繁に情報交換、相談をして支援を行っている。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	◎	職員間で支援の工夫や利用者の気持ちなどを適宜話貼っている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	◎	記録や本人の様子などをみて声掛けを適宜行っている。				
		g	おむつ（紙パンツ・パッドを含む）を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	◎	大きく使用するものを変更する場合（リハパンの導入）は家族にも状態を説明するようにしている。また、本人とも相談し、納得した下着を使うようにしているし、納得ができない場合も根気よく説明を重ねるようにしている。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ（紙パンツ・パッドを含む）を適時使い分けている。	◎	服薬状況や体調、時間帯にあわせて下着や紙パンツなど使い分けている。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。（薬に頼らない取り組み）	○	いろいろ工夫しているけれど、出ない場合は医師と相談して薬を使っている。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。（時間帯、長さ、回数、温度等）。	○	曜日は固定している。なるべく、本人が入りたい時間に入られるように支援している。また、なるべく急かしたりはしないようにしている。	◎		○	利用者は、週3回入浴することができる。午前と午後の利用者の入りたい時間帯を確認しながら、湯船に浸かる時間や湯温などの希望に対応している。洗身など、自分でできることを利用者自身でしてもらい、職員は見守りやできないことの介助をしている。また、「入浴したくない」という利用者もおり、翌日に入浴日を変更したり、声かけを工夫したりしながら、入浴できるよう支援している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	◎	それぞれの好みに合わせた入浴の支援をできるだけしている。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	洗身や洗髪などもできる部分は自分でしてもらうようにしている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	◎	時間帯や順番、声掛けの仕方などに配慮して拒否なく入浴してもらうようにしている。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	バイタル測定値がいつもと違うときはもちろん、様子がいつもと違うと感じる場合なども看護師に相談して入浴の可否を判断している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	申し送りノートに夜間の状態を記録し、職員全体で情報共有している。				スタッフ日誌に排泄や睡眠状態などの夜間記録を残し、利用者の状況を把握している。事業所では、生活リズムや散歩などの活動量を考え、夜間に利用者が安眠できるよう努めている。日中にソファなどでうとうとしている利用者は少なく、体力に応じて、昼寝をしている利用者もいる。、また、眠剤などを服薬をしている利用者もいるものの、医師と相談しながら減薬できるよう取り組んでいる。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	◎	そのように取り組んでいるので昼夜逆転している利用者は現状はいない。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	◎	習慣的に服薬している方については敢えて変更していないが、服薬と本人の状況とをよく見極め、看護師、かかりつけ医と相談して減薬したり、服用を中止したりすることもある。			◎	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	それぞれの生活リズムに合わせて支援している。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	季節の手紙を書いたり、電話をしたいとおっしゃる場合は電話をしたりしている。また携帯電話を持たれている方もいる。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	◎	字が書けない場合でも、書ける方法を探したり、シールやハンコを利用して手紙を作れるように工夫している。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	気兼ねなく電話できるように配慮しているし、利用者の状態によっては家族に連絡してもらうようお願いしたりもしている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	◎	手紙が届いたら電話をかけるように促している。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	◎	折々にそのようにお願いしている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	◎	理解しており、お金を所持したり、使える機会を作る支援をしている。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	◎	週1回はかならず買い物に出かけている利用者もいる。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	◎	買い物先の方も理解をしてくれているし、買い物先で地域の知り合いに声をかけられて交流したりもしている。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	◎	入所のタイミングで金銭の所持については相談し、所持している人もいる。また、その後の管理状況に合わせて、支援の形を検討している。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	◎	入所のタイミングで金銭の所持について相談し、所持している人もいる。管理状況に合わせて、支援の形を検討している。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。（預り金規程、出納帳の確認等）。	◎	入所のタイミングで金銭の所持については相談し、所持している人もいる。また、その後の管理状況に合わせて、支援の形を検討している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	◎	できる限りで柔軟に対応している。	◎		◎	職員は、利用者や家族の希望に応じて、可能な限り柔軟な対応している。病院などへの同行受診の希望にも職員が対応し、家族にも喜ばれている。

項目No.	評価項目	小項目	内　容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	◎	締め切ることなく、できる限り、玄関は網戸の状態にしている。また、親しみやすくなるように花や植木、多肉植物などを配置している。	◎	○	◎	事業所の玄関には、ほうき草や花、多肉植物が置かれている。事業所の前には水蓮が咲きている池や、隣地にはゲートボール場がある。事業所には、日頃から近隣住民が野菜などの差し入れを持ってきてくれたり、地域住民が作成した押し花の作品などの事業所内に展示したりすることも多い。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。）	◎	誰にとっても居心地がよい空間になるように、整理整頓や掃除には配慮しており、また臭いにも気を配っている。	◎	○	◎	2階フロアの窓から、瀬戸内海を一望することができ、利用者や来訪者の目を楽しませてくれる。2階の共用空間には畳スペースがあるほか、1階にはテラスもあり、いすやソファも置かれ、利用者はそれぞれの場所で寛いでいる。台所はフロアの一角にあるため、ゆったりとしている。足元に物を置いておらず、利用者の動線が確保されている。1階ユニットの入り口には、地元の木工会が作成した七福神の木工作品や、地域住民が作成した押し花のアートが出迎えてくれる。また、壁面の一角にある決められたボードには、金魚やひまわりなどの折り紙などの作品が貼られているほか、神棚も設置されている。さらに、事業所内は掃除が行き届き、清潔感にあふれている。夜勤者用の仮眠室も設置されている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	誰にとっても居心地がよい空間になるように、整理整頓や掃除には配慮しており、また臭いにも気を配っている。			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節感を感じるもの）を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	季節を感じる花を利用者が畑などから摘んできて飾ることもあるし、季節の折り紙工作を少しだけ飾ったりして楽しんでいる。			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	◎	テラスや畑に自由に出られるように配慮しているし、洋間だけでなく、和室スペースも居心地よく使えるように工夫している。				
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないよう工夫している。	○	設計的に一部脱衣所が見えてしまうが、必ず戸を閉めるなどの配慮を行っている。				
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	入所前の生活習慣に合わせてベッドを撤去したり、使っていたものを持ち込んだりとしている人もいる。	◎		◎	事業所には、仕切りをはずすと2人部屋として使用できる居室もある。居室の入り口は引き戸で、木工の干支の作品や名札が貼られている。ベッドの使用を好まない利用者には居室からベッドを取り除き、すのこの上に布団などを敷いて寝ている。また、居室には物を持ち込むことができるほか、必要な衣類などは家族の協力を得ている。スッキリと片づけられた居室も多く、事業所では利用者に合った空間づくりをしている。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	◎	包丁を砥ぐのが上手な利用者が包丁を砥げるように砥石を置いていたり、したいときに自分で準備できるところにパズルを片付けるようにしたりしている。			◎	トイレや風呂、居室など、誰が見ても分かるよう、木工の干支の作品など手づくりの心のこもった目印が付けられている。また、日によって、トイレの表示マークや居室が分からなくなる利用者もおり、大きく名前や分かりやすい文字で表示をしている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	◎	混乱や失敗が生じた場合、その都度、どうすれば改善されるかを検討して環境を整えている。				
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	◎	包丁を砥ぐのが上手な利用者が包丁を砥げるように砥石を置いていたり、したいときに自分で準備できるところにパズルを片付けるようにしたりしている。また、外回りには畑仕事をするための道具や庭の整備をする道具などがあり、自由に利用者が使っている。				
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	◎	理解しており、どうしても鍵をしておかないといけない状況ではあるが、それでも外に出てもちゃんと帰って来られる利用者が出たいときに外に出られる工夫を職員全員で考えて支援している。	◎	◎	◎	年2回身体拘束などの研修会を実施し、職員は鍵をかけることの弊害を理解している。事業所の玄関は網戸仕様にしているほか、利用者は自由に出入りすることができる。訪問調査日にも、2階の窓から事業所の近くにあるニワトリ小屋などに出かけて、世話をする利用者の様子を見ることができた。時には、開放していることで、職員が利用者を探すこともある。また、事業所では見守りを重視し、利用者の様子を観察しながら、一人ひとりにふさわしい支援を心がけている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	話し合っており、家族の理解を得ている。				
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	◎	理解しており、どうしても鍵をしておかないといけない状況ではあるが、それでも外に出てもちゃんと帰って来られる利用者が出たいときに外に出られる工夫を職員全員で考えて支援している。外に出ているときにはゲートボール場でゲートボールをしている人たちも見守りをしてくれている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	概ね把握できているが、変更があったときなどに時々抜けが生じることがあるが、看護師がフォローできる範囲である。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	何かいつもと違う様子だったり、異常が見受けられる場合は必ず看護師に相談しており、個人記録に記録している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	何かいつもと違う様子だったり、異常が見受けられる場合は必ず看護師に相談しており、個人記録に記録している。また、月に一度、かかりつけ医に利用者1人ひとりの様子の記録を情報提供しており、心配事は相談している。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	島外の病院への受診は原則ご家族にお願いしているが、家族も高齢だったり、遠方の場合は職員が島外の病院受診も支援している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	体調不良時には家族、かかりつけ医と相談し、対応を決めるようにしている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	本人や家族の希望を優先し、なるべく希望に添えるように支援している。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院時には生活の様子や、症状の変遷など本人に関する除法の提供を行っている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	定期的に病院に状態や様子を聞くために問い合わせをしているが、病院によっては個人情報の観点から十分な情報を得られない場合もある。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	関係ができている病院もあるが、なかなか難しい病院もある。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	看護師は休みの日でもオンコールになっているので、些細な事でもみな気軽に相談している。また看護師も介護職に様子などの聞き取りをこまめに行っており信頼関係が築けている。				
		b	看護職もしく訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	看護師は休みの日でもオンコールになっているので、些細な事でもみな気軽に相談している。看護師も介護職に様子などの聞き取りをこまめに行っており信頼関係が築けている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	健康状態や様子の観察をしっかりと介護職員は行っており、気になる症状や様子については看護師に相談したり、看護師が必要を感じたらかかりつけ医に相談したりして早期発見、治療につなげている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	△	十分に理解していないが、気になることはどんな些細なことでも看護師に相談するようにしている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	服薬管理は看護師が主として行うようにしている。配薬もできる限りミスが生じないように仕組み作りに取り組んでおり、服薬もミスをしない仕組み作りに取り組んでいる。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	服薬の種類が変更になった場合は必ず様子に注意することを申し送るようにしており、変化があればメモを残してもらうし、看護師、管理者が様子の変化について聞き取りを行うようにしている。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	服薬が変更になった場合は必ず様子に注意することを申し送り、変化があればメモを残してもらうし、看護師、管理者が様子の変化について聞き取りを行うようにしている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	入居時に重度化した場合のことについては必ず話をするようにしている。また、実際に終末期となった利用者のご家族とは頻回に連絡をとり、かかりつけ医とも連携しながらどのように支援するかを決めている。				事業所には、「重度化した場合の対応に係る指針」があり、入居時に利用者に説明している。事業所では、今までに6人の看取りの実績があり、訪問調査を行った当月にも1名の看取り支援を実施している。重度化した場合には、医師を交えて家族と話し合い、方針を共有して支援をしている。事業所に配置している看護師や診療所の医師とも24時間体制で連絡を取ることができ、職員は安心感がある。また、事業所での看取り支援を希望している場合でも、利用者の容態が変化した場合には、家族から「迷惑をかけるので」と言われたり、家族の意見が分れたりして、入院することも多い。さらに、ターミナル期には、他の職員が見ても分かりやすいよう居室のケア記録を作成し、「○時○分に○○をした」などの詳細な記録が残されている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	重度化した際には家族、かかりつけ医と相談しながら方針を決めている。また決まった方針については必ず職員に周知し、方針に沿った支援ができるようにしている。	○		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	職員の力量や医学管理についての限界、利用者本人への負担などを考慮しながら、どこまでの支援が可能かは常に考えているし、職員や看護師にも相談している。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	職員や看護師と相談したうえで、家族等にはどこまで支援できるかということを説明し理解を得るようにしている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	重度、終末期の利用者の生活を支えるためにかかりつけ医とは十分に連携できていると考えているし、チームで支援する体制も整えられていると考えているが、できる医療には限りがあり、医療の必要性が大きくなるとカバーできない部分が存在する。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。（心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等）	○	管理者だけでなく、年配の職員の力なども借りて支援している。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症（ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等）や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	年に1度は看護師による研修を実施している。また、流行時期には頻繁に注意喚起をするようにしている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	対策マニュアルを作成しているし、ノロウイルス感染症発生時の対応キッドも準備し配置しているが、訓練を日ごろから実施はしていない。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	○	保健所、行政、医療機関からの情報については適宜周知している。地域の感染症の発生状況についても職員間で情報共有している。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	○	地域での感染症の発生状況に合わせて対応への注意喚起は行っている。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	玄関にアルコールと体温計を設置しており、面会前には体調不良がないか、家族も健康かというようなチェックリストを設置している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	帰宅願望がある利用者の対応にはご家族にも協力をお願いしている。また、本人の希望がある場合にはご家族にも伝えなるべく実現できるように協力をお願いすることもある。				コロナ禍において、事業所では面会制限を設けているものの、現在はワクチン接種をしたこともあり、6月中旬から町内の家族に限定し、ロビーやテラスを活用して15分程度の面会にも対応している。家族には、契約時に気軽に相談できることを伝えているものの、管理者から電話をかけると何事かあったかのように、驚かれる家族もいるため、最小限の連絡に留めている。事業所には家族会もあり、利用者と一緒に花見を実施したこともあったが、家族が気を遣い、食事をして情報交換をする程度になった経緯がある。現在は、事業所として、家族を呼びかける行事の開催や活動はできておらず、家族も理解している。また、職員が電話で家族に受診などの報告をするほか、月1回「さくら便り」を送付している。さらに、事業所では、日々利用者を撮影し、ほぼ毎日利用者の写真を掲載したブログを更新し、家族から喜ばれている。事業所の運営上の事柄や出来事も、事業所便りを活用しながら、家族に細かく知らせている。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。（来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等）	△	そのように取り組んでいたが、今はコロナ禍の影響で家族の入室はお断りしている。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。（食事づくり、散歩、外出、行事等）	△	今年はコロナ禍の影響で家族の参加できる行事は一切実施していない。面会だけは制限付きで可能にしているので、交流だけは維持できている。	○		○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。（「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等）	◎	毎日ブログにて日々の様子をたくさんの写真とともに伝えるようにしている。月に一度はお便りも出している。	○		◎	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して報告を行っている。	△	変わったことがあれば家族に連絡するようにしているし、連絡をした際には思いなどを聞き取るようにはしているが、利用者によって頻度に差がある。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。（認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等）	○	年に数回しか来所できないご家族に対しては来所時、面会の最初は同席し、様子や変化をさりげなく伝えるとともに、会話のフォローなどをするようにしている。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。（行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等）	○	大きな変更を実施する場合は変更前に家族に報告するようにしている。また職員の退職なども月に一度のお便りで報告している。	◎		◎	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。（家族会、行事、旅行等への働きかけ）	×	今年は家族会の実施はできていない。				
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にした対応策を話し合っている。	◎	折々に話し合っている。				
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行っている。	△	不安定な利用者に関しては定期的に行っているが、安定しているご家族に対してはあまり行えていない。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	◎	契約締結時にかなり時間をかけて説明をしている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	退去については納得を得たうえで、転出先の調整もきちんと行いトラブルにならないようにしている。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。（食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等）	◎	契約締結時に説明し同意を得ている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ.地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	◎	事業所の目的や役割を積極的に地域に説明してきたし、最近は地域の理解もしっかりと得られているように感じる。		○		コロナ禍以前は、利用者と一緒に運動会などの地域行事に参加したり、自治会の会合や清掃なども協力したりしている。管理者を含めて、ほとんどの職員が地元に住んでおり、顔見知りの地域住民も多い。お話しやさくらカフェなどの有償ボランティアの協力もあり、交流することも多い。さくらカフェを活用して、月1回さくら茶話会を開催しているほか、社協職員などと福祉交流会も開催することができている。また、事業所では、小学2年生の「町たんけん」に協力したり、中学生の頃からつながりのある高校生のボランティアを受け入れたりして、交流を深めている。さらに、保健センターへの行く時に地域住民が事業所へ立ち寄ってくれたり、野菜などの差し入れを持ってきてくれる住民も多い。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	◎	日常的な参加や清掃活動、自治会の会合への参加はもちろん、地域行事への参加も積極的に行っているし、認知症についての勉強会や地域向けのカフェの開催なども実施して地域との繋がりを作っている。		○	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	◎	よく声をかけてもらえるし、見守りも得られている。				
		d	地域の人が気軽に立ち寄ったり遊びに来たりしている。	◎	地域の人がよく利用者に会いにきてくれたり、保健センターに行く途中で利用者と立ち話をしたりしている。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	◎	地域の人がよく利用者に会いにきてくれたり、保健センターに行く途中で利用者と立ち話をしたりしている。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	◎	利用者の出掛け先の一つになっているさくらカフェはボランティアが運営してくれており、また同じ共有スペースを利用している子育て支援サロンや手芸部、絵画部がカフェの環境を整えたり交流をしたりと支えてくれている。				
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	◎	買い物などは快く受け入れてもらえているし、マスクの制作と販売では地域の物産センターや整骨院が販売に協力してくれており、地域の人が積極的に購入してくれたりしている。				
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	◎	積極的に出かけるようにしているし、地域の人に理解を得られるように情報発信にも力を入れている。				
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	今年はコロナ禍の影響で書類開催になった回もあるが、開催できたときには地域の方やご家族などいつも支援してくれている人達が参加してくれた。	○		○	今年に入り、運営推進会議はコロナ禍のため書面で開催することが続いていたが、訪問調査の当月には、集合形式で開催することができている。会議には、地域住民や民生委員、社協職員、小学校教諭、町担当者など、多くの参加を得て開催することができている。以前は、会議の開催日も参加メンバーが参加しやすい日を調整していたが、現在は奇数月の第2火曜日の開催に固定している。また、事業所として、外部向けの行事で「〇〇をしたい」という場合には、参加メンバーに住民への参加呼びかけや人材集めの協力も得ることができているほか、提案に対して、アイデアや開催方法などの視点を教えてもらうこともあり、事業所としても多くのメリットを得ることができている。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	◎	サービスの実際や地域に向けた取り組み、外部評価の結果と改善にむけた取り組みなどを報告している。また、今後に取り組みたいことなどについても地域の意見をもらっている。			◎	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	◎	運営推進会議で出た意見をうけて改善したり取り組んだりしたことや、その結果については次の運営推進会議で報告するようにしている。		○	◎	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	◎	メンバーは年度の初めに前年度の活動を参考にして委任し、なるべく全員が参加できる日程と時間帯で実施するようにしている。		○		
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	△	誰でも見られるようにしているが、議事録があるということを周知していないので公表しているとは言えない。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	◎	利用者が入所してからも地域から切り離されることなく、施設が利用者にとって安心して寛げる家となるように取り組んでいる。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	△	事あるごとに理念については伝えるようにしているが、まだまだ浸透しているとはいいがたい。	○	○		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	◎	今年はコロナ禍の影響で外部の研修は法定研修以外は受けることができなかったが、内部研修は毎月実施している。また外部研修についても受講しやすい仕組みを整えている。				週2回程度、代表者の来訪があり、利用者や職員の話しに耳を傾けてくれている。事業所では、月1回研修会を実施して、職員のスキルアップに努めているほか、外部研修にも参加することができる。管理者は、職員の退社のタイムカードを押す時に、「何か気になることはないか」などと声をかけ、職員の話しを聞くこともある。また、代表者や管理者、職員同士は話しやすい職場環境づくりができており、結果の有無は別にしても、代表者は職員の改善点などの意見に耳を傾けてくれることもあり、職員は快く感じている。さらに、事業所では職員の離職率も低い。
		b	管理者は、OJT（職場での実務を通して行う教育・訓練・学習）を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	スキルのある職員に技術の伝達を依頼したり、実際の現場で指摘した方が良いと思うことは指摘したり、職員間で改善できるような雰囲気づくりをしたりと工夫して取り組んでいるし、実際スキルアップしていると感じる。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	◎	職員の意見や改善案などは必ず検討して妥当であれば取り入れてくれるので風通しがよく、職員も意欲的に働ける仕組みができていると感じる。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。（事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加）	○	相互研修への参加を促したり、町内の他事業所への見学も調整するようにしている。今年は他施設への見学は行かれなかったが、社協のケアマネさんに講師をしてもらい家族支援についての研修を実施した。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	なるべく言いたいことは言える環境を作っているつもり。また、人間関係が円滑にいくように配慮もしている。	◎	○	◎	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	年に2回の研修を実施しているし、申し送りや日々のケアのなかでも機会があれば注意喚起を行っている。				月1回実施する研修会の中で、虐待防止などを年1回テーマに取り上げて職員は学んでいるほか、管理者は日々の申し送りなどを活用して、不適切なケアが起こらないよう、職員に注意喚起をしている。不適切なケアが見られた場合には、管理者等からその場で注意するほか、全体ミーティングなどを活用して、「なぜ起こったのか」を話し合い、未然の再発防止にも努めている。また、運営推進会議の中で、身体拘束適正化委員会から不適切な案件があれば報告をしているものの、職員が委員会の存在までの理解には及んでいない。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	毎日の申し送りの際に必ず話し合っているし、職員が仕事を終えて帰るときに気になることはないか声をかけて聞くようにしている。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見過ごされることがないよう注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	不適切なケアに繋がりそうなケアや声掛けについてはその場で注意をしたり、なぜ起こったのかを検討したりするようにして未然に手を打つようにしている。			○	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	◎	職員の話をきいたり、表情や様子は注意してみるようにしている。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	研修やミーティングなどで事あるごとに確認している。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	研修においては必ずしているし、ミーティングや申し送りでも懸念事案が上がる場合にはその場で話し合いをし、結果を上長報告している。				
		c	家族等から拘束や施錠の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	家族から拘束や施錠を要望されることはないが、もし要望されても事業所としての方針をしっかりと説明し納得してもらえるように話し合いをする。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	△	内部研修のなかで学習する機会を作っているが定着する頻度で研修はできていない。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	△	必要とあれば支援を実施するが、現状で該当する家族がいない。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関（社会福祉協議会、後見センター、司法書士等）との連携体制を築いている。	○	地域包括支援センターや社会福祉協議会とはこまめに連携し情報共有を行っている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	△	マニュアルを作成し、職員が自由にみられるところに配置してある。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	年に一回は応急手当、救命救急の講習を実施しており、これまでも救急の対応はしてきている。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一歩手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	△	事故報告、ヒヤリハットを作成することもあるが、作成せずに対応協議と周知に留まることもある。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	△	それぞれのリスクについては検討しており対応も取り決めているが時々おろそかになることもある。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	×	マニュアルは作っておらず、苦情を受けた場合は速やかに管理者に報告し、管理者が対応することとしている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	利用者、家族、地域からの苦情に対しては速やかに対応策を検討している。大きな苦情に関しては町に相談して助言を仰ぐこともある。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	対応が決定したらすぐに苦情を入れた方に連絡をとり、どう改善したか伝えるようにしている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。（法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等）	○	ケアプランを見直す際に思いや希望を聞き取るようにしている。また、表情が芳しくないと感じたときにはこまめに声をかけるようにしている。			○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見や要望を聞き、新たに知ることもある。家族からは、一部の面会は再開しているものの、時間に限りがあるため、電話連絡時などを活用して、管理者等は気軽に意見を伝えてもらえるよう努めている。また、管理者は、日々の退社時に職員に声をかけ、どんな小さいことでも聞き、職員は安心して帰宅している。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。（法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等）	○	契約の際に、要望や気になることなど気軽に問い合わせてもらうように連絡先を伝えている。また面会や電話などの機会があるときには要望などについて伺うようにしている。	○		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	△	遠方の家族や不安定な利用者の家族には管理者に直通の携帯電話の番号を伝えている。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	◎	代表者も夜勤を月に2度はしているし、週に1度は必ずフロアの様子を見に来て職員の要望や提案を聞いている。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	◎	職員の提案は必ず、妥当かどうかを検討するようにしている。提案を採用する場合は速やかに全体に周知しているようにも心掛けている。			◎	

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	サービス評価の評価項目を利用して職員のケアのセルフチェックをし、ケアについての自己覚知を促している。				外部評価の自己評価は、一部の項目を取り上げて職員のケアのセルフチェックとしても役立てているものの、現在管理者のみで作成しているため、職員の意見も取り入れながら自己評価を一緒に作成できることを期待したい。外部評価の結果は運営推進会議の中で報告するほか、全体ミーティングなどを活用して、全ての職員に周知している。また、会議の書面開催が続いていたこともあり、地域アンケートの結果からは、評価の内容が少し伝達できないないことを窺うことができる。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	◎	評価の結果はかならず職員会議・研修においてフィードバックし、対策を協議したり、ケアの変更を指示したりしている。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	◎	目標達成計画は評価結果がでたときに全職員に周知し、取り組みについて話し合うようにしている。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	評価の結果と目標達成計画、前年度の目標達成計画の達成度を運営推進会議で報告するようにしている。運営推進会議に地域包括支援センターや町の職員も参加しており、町や地域包括支援センターにも伝わっていることにしている。	○	△	○	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	前年度の目標達成計画の達成度を運営推進会議で報告するようにしている。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	○	マニュアルを作成し、火災想定、地震想定では実際にマニュアルを運用して避難訓練を実施している。				事業所では、利用者と一緒に火災や地震を想定した避難訓練を実施している。避難訓練の実施状況は、事業所便りを活用して家族に報告できているものの、利用者家族アンケート結果からは、全ての家族にまでは伝わっていないことを窺うことができるため、コロナ禍の収束後には家族会などを活用して報告したり、家族に訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、家族に理解が得られる取組みを期待したい。また、現在はコロナ過で実施されていないものの、地域の防災訓練にも参加協力をすることができている。さらに、運営推進会議の開催に合わせて、コロナ禍の感染症対策を含めた、大規模災害時のBCP（事業継続計画）訓練も実施している。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	△	夜勤帯を想定した訓練は実際に実施できていない。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	定期的に実施し、足りないものなどを適宜買い足したり、買い直したりしている。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	◎	地域の防災訓練にも参加しているし、今年は運営推進会議内で南海トラフ地震とコロナウイルス感染症を併せてBCP訓練を実施した。	×	△	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	○	地域の防災訓練にも参加しているし、今年は運営推進会議内で南海トラフ地震とコロナウイルス感染症を併せてBCP訓練を実施した。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	◎	月に一度、茶話会と称して認知症についての勉強会をしている。今年は包括支援センターが実施した認知症についてのパネル展示にも参加させてもらった。3か月に1度は地域向けに認知症について書いたチラシを新聞に折り込んでいる。またほぼ毎日、GHでの利用者の様子を写真付きでブログに掲載している。				事業所として、地域住民から相談があった場合には対応をしている。事業所では、年4回事業所便りを、新聞の折込チラシで地域住民に配布し、事業所の取組みを周知している。月1回、「さくらカフェ」を活用して、地域住民も参加できる「さくら茶話会（認知症カフェ）」を開催し、認知症をテーマに話し合ったり、相談支援をすることもできている。茶話会の参加者から、「別の場所でもさくらカフェを開催して欲しい」などの意見が出され、昨年10月から週1回、開発センターで地域住民も集える「さくら浜カフェ」を開催するようになっている。また、事業所として福祉交流会を実施し、社協職員などの参加を得て情報交換などはできているものの、町担当者の参加にまでは至っていない。さらに、小学生の「町たんけん」や高校生のボランティアの受け入れをしている。事業所では、町行政や地域包括支援センターとの連携も取れている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	◎	茶話会で相談を受けることもあるし、地域のひとが相談に来ることもある。適宜、相談に対応している。		×	○	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	◎	コロナ禍で事業所を解放するのは難しいが、テラスにて小学生の社会科授業を受け入れたり、運営しているさくらカフェで茶話会を開催したり、古民家を借りて週1回の地域の人のためのカフェを実施したりしている。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	◎	有償ボランティアを1日1人受け入れている。小学校や中学校の職業体験などの受け入れも実施している。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	○	地域の行事、イベントなどには積極的に参加させてもらっている。			○	

（別表第1）

サービス評価結果表

サービス評価項目

（評価項目の構成）

Ⅰ.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

Ⅱ.家族との支え合い

Ⅲ.地域との支え合い

Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取組み内容をＰＲ!!!

ーサービス向上への３ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人　愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和　3　年　7　月　30　日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	（回答数）	16名	（依頼数）	18名
地域アンケート回答数	8名			

※事業所記入

事業所番号	38932000034
事業所名	グループホームさくらや
（ユニット名）	わかば
記入者（管理者）	
氏　名	森崎　阿里
自己評価作成日	令和　2　年　12　月　11　日

［事業所理念］	［前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果］	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】
我が家のようにゆったり、ほっこり	・利用者の居室を個人の空間と認識し、入室時には配慮をするという意識を職員全体で持つために、全体ミーティングや日々の業務の中で注意喚起を行った。概ねの職員が配慮して行動できるようになった。 ・ケアプランの更新のあった入所者のケアプランは全体ミーティングで共有するようにしており、目標は個人記録の上部に明記している。目標を意識してケアにあたるところまでは改善できていない。 ・利用者の日々の様子を職員で共有するためにフェイスシートを作成し3か月に1度見直しをしているが、有効活用できていない。他の方法を検討しているところ。 ・再アセスメントツールがなかったので介護計画評価表を作成し、再アセスメントに役立てている。 ・運営推進会議を家族に認識してもらうために毎月のさくらや便りに運営推進会議のことを掲載するようにした。	事業所は島内にある唯一のグループホームで、海や山などの豊かな自然に恵まれた場所に位置している。事業所の2階のフロアの窓からは、海の絶景を眺めることができ、利用者や来訪者などを癒してくれる。代表者は全ての職員を信頼し、事業所での利用者の生活を委ねている部分もあり、結果の有無は別にしても職員から出された改善点や要望などには耳を傾けてくれ、安心して利用者の支援をすることができる。職員同士の仲は良く、コミュニケーションも取れていることをあり、職員の離職率も低い。事業所では、利用者を見守りながら自由に外出することができ、訪問調査日には、事業所前の道路を挟んだ場所にあるニワトリ小屋や畑に出かけ、ニワトリの世話や水やり、草引きなどをしている利用者の姿を見ることができた。また、事業所として、今年から介護ソフトを導入してICT化などの業務改善を図り、職員はタブレットを活用して記録している。さらに、週3回、事業所より少し高台にある町のひまわり百年館を活用した「さくらカフェ」を運営し、利用者と一緒に歩いて出かけ、コーヒーやお茶などを飲みながら楽しんでいる。管理者は日々の退社時に職員に声をかけ、どんな小さいことでも聞き、職員は安心して帰宅することもでき、働きやすい職場環境づくりにも努めている。

評 価 結 果 表

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅰ.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	◎	できるだけ、本人がしたいようにできる支援をしている。	◎		◎	日々の生活の中で、職員は利用者から思いや希望、意向を聞いて、把握している。また、思いの把握が難しい利用者には、その時々で違うことを話すこともあって記録に残したり、職員が常に本人の表情や行動などを観察し、察することもある。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	◎	自己表現が難しい方でもその方の表情や仕草からどう感じているかを汲み取るようにしている。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人（家族・親戚・友人等）とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	家族や知人が面会に来た時や、用事があって電話をしたときなどに、入所前の様子などの話を聞くようにしている。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	△	ケアプラン作成時にケアプランに記入して共有するようにしているがケアプラン作成時以外の時にその記録を職員が見ていることはほぼない。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	本人のアウトプットを元にケアが適切かどうかを判断するように努めている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人（家族・親戚・友人等）から聞いている。	○	家族や知人が面会に来た時や、用事があって電話をしたときなどに、入所前の様子などの話を聞くようにしている。			○	入居前に、職員が利用者や家族から、これまでの暮らし方や現状などを聞き、フェイスシートに記載している。島内の利用者は地元に知り合いも多く、散歩時に利用者と職員は友人や知人、もともと住んでいた近隣住民など出会うこともあり、情報を聞くことも多い。さらに、面会時に家族から新たな情報を聞くこともある。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力（わかること・できること・できそうなこと等）等の現状の把握に努めている。	◎	毎月、全体ミーティングで利用者一人ひとりの状況を職員全員で検討している。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	職員それぞれが把握しているし、フェイスシートにも記載するようにしている。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。（身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等）	◎	不安や不安定になっている場合は申し送りや始業、終業時などで職員同士で話し合い要因を検討している。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	◎	把握しているし、職員間で情報の共有もできている。				
3	チームで行うアセスメント（※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む）	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	月一の全体ミーティングで検討している。必要があれば家族にも相談し意見を聞いたりしている。			◎	事業所では、利用者が自宅のように好きな時に自由に外出できるよう支援している。月１回全体ミーティングを実施し、「利用者が事業所を我が家のように、可能な範囲で自由な暮らせているか」などを職員間で話し合うほか、何か問題のある場合には、「事業所内でどういうことが起こっているのか」を初心に戻って、本人視点で検討している。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	◎	提案や改善などは管理者をも交えて職員同士で検討している。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	◎	検討し変更した対応により本人がどのように変化しているかなどは職員全員で観察し次の対応を検討している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	◎	本人の生活や思いに即した計画を作成している。				利用者本人の思いや気持ちを聞くほか、月1回の全体ミーティングにおいて職員間で意見やアイデアを出し合い、管理者や計画担当者を中心に介護計画を作成している。また、重度の利用者には、事業所でなるべく落ち着いて生活が送れることを念頭に置いて、計画作成をしている。さらに、介護計画の作成後には、全体ミーティングなどを活用して、職員に課題や目標、サービス内容などを説明し、周知している。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	◎	日々の報告、本人の気持ちを反映してケアプランを作成し、それをもとに家族ともケアについて話し合いプランを決定するようにしている。	○		◎	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	なるべく落ち着いて穏やかに生活できる内容を検討するようにしている。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	家族、地域の支援まで盛り込んだケアプランはあまり作成できていない。				
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	ケアプランを作成したときは全体ミーティングで作成したケアプランを説明しており、短期目標、長期目標は個人記録の上段に明記している。			○	事業所では、今年から介護ソフトを導入してICT化を図り、職員はタブレットを活用して記録している。全体ミーティングの中などの中でよく職員から意見が出され、目標を意識したケアが実践できるように、個人記録の様式を改善している。現在の個人記録には、利用者の「長期目標と短期目標」の記載のほか、「目標について、変わったことなど」を記載する欄もあり、職員は確認しながらその日の気になることを記載している。また、スタッフ日誌にも全体のことを記載と日々の短期目標の評価も実施している。さらに、利用者一人ひとりの発言した言葉や表情などが記録されている。今後は、タブレットの活用に不慣れな職員もいるため、支障とならない程度に使用方法を再度学び、サービス実施記録のチェックなどから始めるなど、徐々にICTを有効活用できることを期待したい。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	毎日、短期目標の達成度を評価している。			○	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子（言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等）や支援した具体的内容を個別に記録している。	◎	個人記録に記録するようにしている。			◎	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	×	それぞれの利用者に応じた対応や気づきは申し送りで共有し実施しているが個別に記録はしていない。			○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	半年に一度は見直しをしている。			◎	入居後まもない利用者の介護計画は、見直し時期を早めることもある。事業所では、介護認定の期間を基本として、介護計画の見直しをしている。計画の見直しには介護計画評価表を作成して、利用者の再アセスメントを実施するほか、フェイスシートを活用し、月1回の全体ミーティングの中で話し合い、利用者の状況を確認している。また、利用者の重度化や相性などにより、ユニットをまたいで居室の変更時のほか、入退院時やターミナル期などの急変時には、現状に即した介護計画の見直しをしている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	月一の全体ミーティングでそれぞれの利用者の状況や希望などを検討している。			◎	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	△	入院やターミナルなどかなり大きな変化が生じた場合のみ定期外の見直しを実施する。			△	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	毎日の申し送りで職員が気づいた問題などの対応は検討している。大きな案件は常勤会議を開催して対応を検討することもある。				日々の朝・昼の申し送りの中で、問題点や気になることを話し合うほか、月1回全体ミーティングを実施している。管理者の一存で決定などができない場合には、正規職員を集めた常勤会議を実施している。また、参加できなかった職員には、全体ミーティングの会議録などを回覧するほか、複雑な内容は、口頭での説明を付け加えている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	◎	ケアの方向性は管理者や施設長が最終的に判断することが多いが、具体的な問題提起や対応、情報共有などはフロアを担当する職員の意見で決めている。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	○	なるべくそうできるように努力している。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	○	会議記録を回覧し、確認したらサインをするようにしている。			◎	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	◎	申し送りを徹底しており、絶対に伝えたい内容は申し送りに加えてメモをはさむようにしている。			◎	日々の朝・昼の申し送りを活用して、確実な情報共有をしている。事業所ではタブレットを活用した記録など、ICT化で共有しやすくなっているものの、年配の職員は活用に不慣れなため、紙ベースのスタッフ日誌とバイタルチェック申し送りの記録を作成するほか、重要事項は1週間ぐらいメモを挟み共有できるようにしている。また、複雑な内容は、口頭で職員への説明もしている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。（利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等）	◎	毎日、終業時の面談などで伝達できるようにしている。	○			

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2)日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にした支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	◎	ドライブや買い物、草抜きなど、それぞれのしたいことをできるように支援している。				利用者が飲み物や誕生日のケーキの種類、その日にしたいことなどを自己決定できるよう、職員は声かけなどの支援をしている。意思表示が難しい利用者には、日頃から職員がよく観察し、選択できる機会を見逃さないように努めるほか、落ち着いて生活が送れるよう取り組んでいる。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。（選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等）	◎	何をしたいか、行きたいか、行きたくないか、どの帽子をかぶりたいかなどそれぞれの意向を聞きながら支援している。			◎	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	◎	基本的に「どうせできない」という考え方に基づいた支援の仕方はしないようにしている。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にした支援を行っている。（起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等）	○	ときどき、職員のペースでケアをしてしまっていることがあるが、概ね利用者のペースに合わせた支援ができている。				
		e	利用者の活き活きした言動や表情（喜び・楽しみ・うるおい等）を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	利用者の表情を観察しながら支援している。			○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	◎	表情や仕草に注意してなるべく良い表情で穏やかに生活できるよう支援している。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にした言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	◎	配慮した言葉がけをしている。	○	○	○	事業所では月１回研修会を実施し、年１～２回尊厳などをテーマにの取り上げ、職員は学んでいる。全体ミーティングなどを活用して、管理者は、「居室は利用者の家であり、黙って入らないように」などの注意喚起をしていることもあり、職員は居室を大切な場所と認識し、入退出時にはきちんと声かけをすることができている。また、利用者の呼び方は、基本「○○さん」と呼んでいるものの、昔からの馴染みの呼び名で「○○にい」と、家族や本人の了承を得て呼ぶこともある。さらに、職員は利用者へ配慮した声かけや態度が取れることを心がけており、排泄時の呼びかけなど、他の利用者が気づかないようさりげない声かけにも対応するなど、利用者の安心した笑顔が見られることもある。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	◎	他の利用者の目を意識した声掛けをするようにしている。			◎	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮ながら介助を行っている。	◎	できるかぎり配慮して行っている。				
		d	職員は、居室は利用者専有の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	プライバシーの場所だと理解し、配慮して出入りをするように心がけている。			◎	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	研修での啓発もしており、またセルフチェックにおいても職員全体として情報の取り扱いに関する意識は高かった。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	洗濯物を畳んだり、掃除をしたり、食事の下ごしらえをしたり、若い利用者に高齢の利用者の見守りをお願いしたりと出来る範囲で仕事を依頼して役割をもって生活してもらっている。				利用者同士が大きなトラブルにならないよう、職員は相性を見ながら、時にはユニットを超えて利用者の居室を変更する場合もある。よく気のつく利用者が、他の利用者の髭剃りなどを手伝うこともある。また、レクリエーション時に「パズルができない」という利用者に対して、職員が声かけをしても無理な場合でも、他の利用者が言い方を変えて声をかけると、和んだ状態で一緒にすることもあり、職員は利用者から教えられる場面もある。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	◎	お互いができることをして補い助け合いながら生活するように支援している。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。（仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わえる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等）。	◎	それぞれが楽しく過ごせるように人間関係には配慮している。			◎	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	利用者同士で大きなトラブルにならないように、相性などを見極めてユニットを決めている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	○	面会や電話などを通じて関係をなるべく維持できるように配慮をしている。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	把握しているけれど、入所前と同程度の関わりの維持までは至っていない。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	地域行事などに参加したり、買い物に出かけたりして、地域との繋がりが途切れないように配慮している。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	コロナ禍で制限をかけているが、面会できる機会を維持するように努力している。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。（職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない） （※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む）	◎	施設周辺は好きなように出入りができるように家族と話をし、できるかぎりそれぞれの希望に沿った支援をしている。	○	○	◎	コロナ禍以前は、利用者からの要望があれば、島内のほとんどの場所にドライブなどで出かけられるよう支援できていた。現在のコロナ禍においても、事業所周辺を散歩したり、お弁当を持って桜などの花見に出かけたりしている。また、週3回、事業所より少し高台にある町のひまわり百年館を活用した「さくらカフェ」に歩いて出かけ、コーヒーやお茶などを飲みながら利用者と一緒に楽しんでいる。事業所では、日中利用者は職員の見守りもあって自由に外出することができ、訪問調査日には、事業所前の道路を挟んだ場所にあるニワトリ小屋や畑に出かけ、ニワトリの世話や水やり、草引きなどをしている利用者の姿を見ることができた。さらに、車いすを使用している重度の利用者も、職員の手助けで外のカフェに行ったり、ベランダで日光浴をすることができている。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	◎	有償ボランティアの助けを借りて外出の個別対応を柔軟に行っている。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	◎	テラスやカフェなど快適に過ごせる場所をいくつか作り、どの人も戸外に出やすくできるように工夫している。			◎	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	○	島内は希望があれば概ねどこでも連れて行っている。島外は希望どおりには難しいが、機会があれば連れて行ったりもしている。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	認知症の研修をしたり、申し送りや終業時の面談などで行動の原因などを認知症の行動・心理症状の観点から検討したりするようにしている。				月１回実施する研修会などで、職員は認知症のことを理解している。日々の生活の中に、散歩や体操を取り入れてながら、事業所では利用者の心身機能の維持に努めている。また、洗濯物干しや野菜づくり、ニワトリの世話など、できることを利用者は手伝っている。さらに、認知症状が進行しても、食器洗いをしてくれ、放っておく洗剤を流しっぱなしにしてしまう利用者にも、そっと洗う場面だけをセッティングして手伝ってもらうなど、できることをしてもらえるような環境づくりをしている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴（筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等）を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	◎	散歩や口腔体操、全身体操など強制ではないけれど、習慣として取り組めるように工夫をしている。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。（場面づくり、環境づくり等）	◎	家事や野良仕事、包丁研ぎなど、できることはなんでもしてもらうようにしている。	◎		◎	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	◎	それぞれに何かしら役割をもって生活してもらっている。				洗濯物干しやたたみ、草引き、畑仕事、包丁研ぎ、寝る支度など、日々の生活の中で利用者は一人ひとりの役割や出番づくりができている。職員は手伝いなどをしてもらった場合には、必ず利用者に「ありがとう」「助かります」などの感謝の意を伝えている。以前事業所では雑巾づくりをしていたが、昨年からのコロナ禍において、裁縫を活用したマスクづくりを手がけ、小学校の入学祝に贈呈したり、安価で販売したりするなど、地域住民からも喜ばれ、利用者の励みにもつながっている。また、事業所では卵からふ化をさせ、ひよこやニワトリを育てるなど、地域の保育園児が散歩がてらに見学することもあり、楽しみや張り合いが持てるよう支援している。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	◎	できること、役割をたくさん持ってもらい、症状が進んでもできることがなくならないようにしている。	◎	○	◎	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	○	マスクを作って安価に販売することで地域の方に喜ばれているし、利用者たちにとっても張り合いになっている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	それぞれの好きな服を着てもらったり、好みの美容室に行ける支援をしている。				毎朝、自分で着る服を選び、着替えている利用者も多い。着替えが困難な利用者には、上着をおしゃれにすることで、本人らしさを保てるよう支援している。男性利用者には、入浴時などに声をかけ、自分で髭剃りをしたり、職員が仕上げを手伝ったりしている。中には、よく気のつく利用者が、他の利用者の髭剃りなどを手伝うこともある。また、訪問調査日には、利用者の食べこぼしをさりげなく拾う職員の姿を見ることができた。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	○	それぞれの好きな服を着てもらったり、好みの美容室に行ける支援をしている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	本人の様子や着心地などに配慮して服装などを決めている。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	島外の外出や特別な外出の場合はカチッとした服装になるように支援している。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にしてさりげなくカバーしている。（髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等）	○	髭剃りなど、さりげなく声掛けをしている。	◎	○	◎	
		f	理容･美容は本人の望む店に行けるように努めている。	◎	本人が希望する美容室に予約をして連れて行っている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	◎	重篤な状態であってもデイルームに出てくるときには羽織を選んだり紙を整えたりして出て来られるように配慮している。			◎	
17	食事を楽しむことの できる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	美味しく、安全に食べられるように器や食形態について、利用者の状態を観察しながら考えてくれている。				管理栄養士の資格を持つ管理者が、事前に作成した献立の組み合わせを、利用者の意見を取り入れて変更しながら作成している。地域住民から野菜や魚などの差し入れをもらうこともあり、献立を変更して刺身などを提供することもある。利用者と一緒に不足している野菜などの買い物に出かけ、1階ユニットのキッチンで職員が調理をしている。皿洗いなど、利用者のできることを見つけて一緒に手伝っている。現在、事業所にはアレルギーのある利用者はいない。食器は、地域住民から自宅で眠っている行事用などの物をもらい受けて活用しているほか、麻痺のある利用者には、希望に添って軽量の食器を用意している。また、現在のコロナ禍において、同じ食卓を囲むことを控えているものの、職員は少し離れた場所で利用者の見守りや介助をしながら、利用者と同じ食事を摂ることができている。事業所には比較的元気な利用者が多く、自分自身で食べることのできる利用者も多い。食前には利用者と一緒に口腔体操を行い、利用者は食事時間を心穏やかに待っている。さらに、お弁当を持って花見をしながら食べたり、土用の丑の日にはうなぎを提供したりするなど、利用者が楽しめるような工夫もしている
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともに行っている。	○	できる範囲で利用者とともにしている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	できる範囲で利用者とともにしている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	アレルギーや禁忌食品はキッチンの棚に掲示してある。好き、嫌いはザックリと把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	季節に合わせて献立を変えている。また、献立にないものでも、地域の人や職員が季節の野菜や果物を差し入れてくれると、献立を変更し、その食材を使って調理している。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼･嚥下等の身体機能や便秘･下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。（安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等）	○	食形態に配慮しつつ、食べ方、喫食状況を観察しながらなるべく常食で食べられるように盛り付けや器、調理方法などを工夫している。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	施設っぽさが出ないように普通の食器を使っている。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	原則は職員も利用者と一緒に食卓についてサポートしながら食べるようにしている。			○	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	◎	重度であっても、できる限り、みんなと一緒に食卓を囲めるように配慮している。また、食形態が違うことで、他に利用者から悪く言われたりする場合には席を配慮して嫌な思いをしないようにしている。	◎		◎	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	体重や排便状態、喫食率をモニターし、食べられてない場合は何が原因かを検討するようにしている。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	体重や排便状態、喫食率をモニターしている。暑い時期は特にOS1を毎日作り、こまめに飲むように取り組んでいる。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	△	食事をしながら、献立や味付け、形態などについて話をすることがある。また、そこで出た改善点は管理栄養士に伝えて献立に反映させている。			◎	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	消費期限を確認し、期限内に消費するようにしている。期限が切れているものは必ず破棄している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	理解しており、必ず食後には口腔ケアを行っている。				毎食後、職員が利用者に声をかけ、洗面台で口腔ケアを実施している。定期的に、職員は自分で歯磨きなどをしている利用者を含めて、一人ひとりの口腔内の状況を確認している。日々の歯磨きの実施の有無なども記録している。また、月1回、有償ボランティアの歯科衛生士に来てもらい、利用者の口腔内の点検をしてもらい、問題のある場合には歯科医の受診につなげている。さらに、歯科医の受診時には、利用者の日々のモニタリング表を提示して、アドバイスを受けている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況（虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等）について把握している。	◎	月に一度、歯科衛生士の点検を受けている。			◎	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	◎	月に一度、歯科衛生士の点検を受けている。問題がある場合には指導を受けたり、歯科受診をしたりしている。また気になることがあれば歯科衛生士に相談もしている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	必ず食後に口腔ケアを行っている。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないよう、口腔の清潔を日常的に支援している。（歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等）	◎	それぞれの能力に応じて、声掛け、チェック、仕上げ磨き、全介助などの支援をしている。			◎	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	◎	月に一度、歯科衛生士の点検を受けている。必要時は歯科医を受診している。また、月に一度、利用者の状態の記録を歯科医師に渡して情報共有をしている。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ（紙パンツ・パッドを含む）の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	◎	理解しており、なるべく、布パンツで過ごせるように支援の工夫をしている。				事業所では、トイレで排泄できることを基本として、声かけや誘導をしながら、利用者が可能な範囲で布パンツで過ごせるよう支援している。コロナ禍以前には、松山にある県在宅介護研修センターの外部研修に参加し、職員はおむつのあて方などを学んでいる。中には、紙パンツを使用している利用者もおり、適切な排泄用品を職員間で話し合い、家族に確認のうえ使用している。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	理解しているが、改善することができないでいる事例も多い。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。（間隔、量、排尿・排便の兆候等）	◎	理解して支援できている。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ（紙パンツ・パッドを含む）使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々の状態にあった支援を行っている。	◎	状態に合わせて、職員間で頻繁に情報交換、相談をして支援を行っている。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	◎	職員間で支援の工夫や利用者の気持ちなどを適宜話貼っている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	◎	記録や本人の様子などをみて声掛けを適宜行っている。				
		g	おむつ（紙パンツ・パッドを含む）を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	◎	大きく使用するものを変更する場合（リハパンの導入）は家族にも状態を説明するようにしている。また、本人とも相談し、納得した下着を使うようにしているし、納得ができない場合も根気よく説明を重ねるようにしている。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ（紙パンツ・パッドを含む）を適時使い分けている。	◎	服薬状況や体調、時間帯にあわせて下着や紙パンツなど使い分けている。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。（薬に頼らない取り組み）	○	いろいろ工夫しているけれど、出ない場合は医師と相談して薬を使っている。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。（時間帯、長さ、回数、温度等）。	○	曜日は固定している。なるべく、本人が入りたい時間に入られるように支援している。また、なるべく急かしたりはしないようにしている。	◎		○	利用者は、週3回入浴することができる。午前と午後の利用者の入りたい時間帯を確認しながら、湯船に浸かる時間や湯温などの希望に対応している。洗身など、自分でできることを利用者自身でしてもらい、職員は見守りやできないことの介助をしている。また、「入浴したくない」という利用者もおり、翌日に入浴日を変更したり、声かけを工夫したりしながら、入浴できるよう支援している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	◎	それぞれの好みに合わせた入浴の支援をできるだけしている。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	洗身や洗髪などもできる部分は自分でしてもらうようにしている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	◎	時間帯や順番、声掛けの仕方などに配慮して拒否なく入浴してもらうようにしている。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	バイタル測定値がいつもと違うときはもちろん、様子がいつもと違うと感じる場合なども看護師に相談して入浴の可否を判断している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	申し送りノートに夜間の状態を記録し、職員全体で情報共有している。				スタッフ日誌に排泄や睡眠状態などの夜間記録を残し、利用者の状況を把握している。事業所では、生活リズムや散歩などの活動量を考え、夜間に利用者が安眠できるよう努めている。日中にソファなどでうとうとしている利用者は少なく、体力に応じて、昼寝をしている利用者もいる。、また、眠剤などを服薬をしている利用者もいるものの、医師と相談しながら減薬できるよう取り組んでいる。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	◎	そのように取り組んでいるので昼夜逆転している利用者は現状はいない。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	◎	習慣的に服薬している方については敢えて変更していないが、服薬と本人の状況とをよく見極め、看護師、かかりつけ医と相談して減薬したり、服用を中止したりすることもある。			◎	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	それぞれの生活リズムに合わせて支援している。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	季節の手紙を書いたり、電話をしたいとおっしゃる場合は電話をしたりしている。また携帯電話を持たれている方もいる。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	◎	字が書けない場合でも、書ける方法を探したり、シールやハンコを利用して手紙を作れるように工夫している。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	気兼ねなく電話できるように配慮しているし、利用者の状態によっては家族に連絡してもらうようお願いしたりもしている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	◎	手紙が届いたら電話をかけるように促している。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	◎	折々にそのようにお願いしている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	◎	理解しており、お金を所持したり、使える機会を作る支援をしている。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	◎	週1回はかならず買い物に出かけている利用者もいる。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	◎	買い物先の方も理解をしてくれているし、買い物先で地域の知り合いに声をかけられて交流したりもしている。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	◎	入所のタイミングで金銭の所持については相談し、所持している人もいる。また、その後の管理状況に合わせて、支援の形を検討している。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	◎	入所のタイミングで金銭の所持について相談し、所持している人もいる。管理状況に合わせて、支援の形を検討している。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。（預り金規程、出納帳の確認等）。	◎	入所のタイミングで金銭の所持については相談し、所持している人もいる。また、その後の管理状況に合わせて、支援の形を検討している。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	◎	できる限りで柔軟に対応している。	◎		◎	職員は、利用者や家族の希望に応じて、可能な限り柔軟な対応している。病院などへの同行受診の希望にも職員が対応し、家族にも喜ばれている。

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	◎	締め切ることなく、できる限り、玄関は網戸の状態にしている。また、親しみやすくなるように花や植木、多肉植物などを配置している。	◎	○	◎	事業所の玄関には、ほうき草や花、多肉植物が置かれている。事業所の前には水蓮が咲きている池や、隣地にはゲートボール場がある。事業所には、日頃から近隣住民が野菜などの差し入れを持ってきてくれたり、地域住民が作成した押し花の作品などの事業所内に展示したりすることも多い。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。）	◎	誰にとっても居心地がよい空間になるように、整理整頓や掃除には配慮しており、また臭いにも気を配っている。	◎	○	◎	2階フロアの窓から、瀬戸内海を一望することができ、利用者や来訪者の目を楽しませてくれる。2階の共用空間には畳スペースがあるほか、1階にはテラスもあり、いすやソファも置かれ、利用者はそれぞれの場所で寛いでいる。台所はフロアの一角にあるため、ゆったりとしている。足元に物を置いておらず、利用者の動線が確保されている。1階ユニットの入り口には、地元の木工会が作成した七福神の木工作品や、地域住民が作成した押し花のアートが出迎えてくれる。また、壁面の一角にある決められたボードには、金魚やひまわりなどの折り紙などの作品が貼られているほか、神棚も設置されている。さらに、事業所内は掃除が行き届き、清潔感にあふれている。夜勤者用の仮眠室も設置されている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	誰にとっても居心地がよい空間になるように、整理整頓や掃除には配慮しており、また臭いにも気を配っている。			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節感を感じるもの）を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	季節を感じる花を利用者が畑などから摘んできて飾ることもあるし、季節の折り紙工作を少しだけ飾ったりして楽しんでいる。			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	◎	テラスや畑に自由に出られるように配慮しているし、洋間だけでなく、和室スペースも居心地よく使えるように工夫している。				
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないよう工夫している。	○	設計的に一部脱衣所が見えてしまうが、必ず戸を閉めるなどの配慮を行っている。				
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	入所前の生活習慣に合わせてベッドを撤去したり、使っていたものを持ち込んだりとしている人もいる。	◎		◎	事業所には、仕切りをはずすと2人部屋として使用できる居室もある。居室の入り口は引き戸で、木工の干支の作品や名札が貼られている。ベッドの使用を好まない利用者には居室からベッドを取り除き、すのこの上に布団などを敷いて寝ている。また、居室には物を持ち込むことができるほか、必要な衣類などは家族の協力を得ている。スッキリと片づけられた居室も多く、事業所では利用者に合った空間づくりをしている。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	◎	包丁を砥ぐのが上手な利用者が包丁を砥げるように砥石を置いていたり、したいときに自分で準備できるところにパズルを片付けるようにしたりしている。			◎	トイレや風呂、居室など、誰が見ても分かるよう、木工の干支の作品など手づくりの心のこもった目印が付けられている。また、日によって、トイレの表示マークや居室が分からなくなる利用者もおり、大きく名前や分かりやすい文字で表示をしている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	◎	混乱や失敗が生じた場合、その都度、どうすれば改善されるかを検討して環境を整えている。				
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	◎	包丁を砥ぐのが上手な利用者が包丁を砥げるように砥石を置いていたり、したいときに自分で準備できるところにパズルを片付けるようにしたりしている。また、外回りには畑仕事をするための道具や庭の整備をする道具などがあり、自由に利用者が使っている。				
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	◎	理解しており、どうしても鍵をしておかないといけない状況ではあるが、それでも外に出てもちゃんと帰って来られる利用者が出たいときに外に出られる工夫を職員全員で考えて支援している。	◎	◎	◎	年2回身体拘束などの研修会を実施し、職員は鍵をかけることの弊害を理解している。事業所の玄関は網戸仕様にしているほか、利用者は自由に出入りすることができる。訪問調査日にも、2階の窓から事業所の近くにあるニワトリ小屋などに出かけて、世話をする利用者の様子を見ることができた。時には、開放していることで、職員が利用者を探すこともある。また、事業所では見守りを重視し、利用者の様子を観察しながら、一人ひとりにふさわしい支援を心がけている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	話し合っており、家族の理解を得ている。				
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	◎	理解しており、どうしても鍵をしておかないといけない状況ではあるが、それでも外に出てもちゃんと帰って来られる利用者が出たいときに外に出られる工夫を職員全員で考えて支援している。外に出ているときにはゲートボール場でゲートボールをしている人たちも見守りをしてくれている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	概ね把握できているが、変更があったときなどに時々抜けが生じることがあるが、看護師がフォローできる範囲である。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	何かいつもと違う様子だったり、異常が見受けられる場合は必ず看護師に相談しており、個人記録に記録している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	何かいつもと違う様子だったり、異常が見受けられる場合は必ず看護師に相談しており、個人記録に記録している。また、月に一度、かかりつけ医に利用者1人ひとりの様子の記録を情報提供しており、心配事は相談している。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	島外の病院への受診は原則ご家族にお願いしているが、家族も高齢だったり、遠方の場合は職員が島外の病院受診も支援している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	体調不良時には家族、かかりつけ医と相談し、対応を決めるようにしている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	本人や家族の希望を優先し、なるべく希望に添えるように支援している。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院時には生活の様子や、症状の変遷など本人に関する除法の提供を行っている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	定期的に病院に状態や様子を聞くために問い合わせをしているが、病院によっては個人情報の観点から十分な情報を得られない場合もある。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	関係ができている病院もあるが、なかなか難しい病院もある。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	看護師は休みの日でもオンコールになっているので、些細な事でもみな気軽に相談している。また看護師も介護職に様子などの聞き取りをこまめに行っており信頼関係が築けている。				
		b	看護職もしく訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	看護師は休みの日でもオンコールになっているので、些細な事でもみな気軽に相談している。看護師も介護職に様子などの聞き取りをこまめに行っており信頼関係が築けている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	健康状態や様子の観察をしっかりと介護職員は行っており、気になる症状や様子については看護師に相談したり、看護師が必要を感じたらかかりつけ医に相談したりして早期発見、治療につなげている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	△	十分に理解していないが、気になることはどんな些細なことでも看護師に相談するようにしている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	服薬管理は看護師が主として行うようにしている。配薬もできる限りミスが生じないように仕組み作りに取り組んでおり、服薬もミスをしない仕組み作りに取り組んでいる。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	服薬の種類が変更になった場合は必ず様子に注意することを申し送るようにしており、変化があればメモを残してもらうし、看護師、管理者が様子の変化について聞き取りを行うようにしている。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	服薬が変更になった場合は必ず様子に注意することを申し送り、変化があればメモを残してもらうし、看護師、管理者が様子の変化について聞き取りを行うようにしている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	入居時に重度化した場合のことについては必ず話をするようにしている。また、実際に終末期となった利用者のご家族とは頻回に連絡をとり、かかりつけ医とも連携しながらどのように支援するかを決めている。				事業所には、「重度化した場合の対応に係る指針」があり、入居時に利用者に説明している。事業所では、今までに6人の看取りの実績があり、訪問調査を行った当月にも1名の看取り支援を実施している。重度化した場合には、医師を交えて家族と話し合い、方針を共有して支援をしている。事業所に配置している看護師や診療所の医師とも24時間体制で連絡を取ることができ、職員は安心感がある。また、事業所での看取り支援を希望している場合でも、利用者の容態が変化した場合には、家族から「迷惑をかけるので」と言われたり、家族の意見が分れたりして、入院することも多い。さらに、ターミナル期には、他の職員が見ても分かりやすいよう居室のケア記録を作成し、「○時○分に○○をした」などの詳細な記録が残されている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	重度化した際には家族、かかりつけ医と相談しながら方針を決めている。また決まった方針については必ず職員に周知し、方針に沿った支援ができるようにしている。	○		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	職員の力量や医学管理についての限界、利用者本人への負担などを考慮しながら、どこまでの支援が可能かは常に考えているし、職員や看護師にも相談している。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	職員や看護師と相談したうえで、家族等にはどこまで支援できるかということを説明し理解を得るようにしている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	重度、終末期の利用者の生活を支えるためにかかりつけ医とは十分に連携できていると考えているし、チームで支援する体制も整えられていると考えているが、できる医療には限りがあり、医療の必要性が大きくなるとカバーできない部分が存在する。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。（心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等）	○	管理者だけでなく、年配の職員の力なども借りて支援している。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症（ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等）や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	年に1度は看護師による研修を実施している。また、流行時期には頻繁に注意喚起をするようにしている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	対策マニュアルを作成しているし、ノロウイルス感染症発生時の対応キッドも準備し配置しているが、訓練を日ごろから実施はしていない。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	○	保健所、行政、医療機関からの情報については適宜周知している。地域の感染症の発生状況についても職員間で情報共有している。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	○	地域での感染症の発生状況に合わせて対応への注意喚起は行っている。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	玄関にアルコールと体温計を設置しており、面会前には体調不良がないか、家族も健康かというようなチェックリストを設置している。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	帰宅願望がある利用者の対応にはご家族にも協力をお願いしている。また、本人の希望がある場合にはご家族にも伝えなるべく実現できるように協力をお願いすることもある。				コロナ禍において、事業所では面会制限を設けているものの、現在はワクチン接種をしたこともあり、6月中旬から町内の家族に限定し、ロビーやテラスを活用して15分程度の面会にも対応している。家族には、契約時に気軽に相談できることを伝えているものの、管理者から電話をかけると何事かあったかのように、驚かれる家族もいるため、最小限の連絡に留めている。事業所には家族会もあり、利用者と一緒に花見を実施したこともあったが、家族が気を遣い、食事をして情報交換をする程度になった経緯がある。現在は、事業所として、家族を呼びかける行事の開催や活動はできておらず、家族も理解している。また、職員が電話で家族に受診などの報告をするほか、月1回「さくら便り」を送付している。さらに、事業所では、日々利用者を撮影し、ほぼ毎日利用者の写真を掲載したブログを更新し、家族から喜ばれている。事業所の運営上の事柄や出来事も、事業所便りを活用しながら、家族に細かく知らせている。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。（来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等）	△	そのように取り組んでいたが、今はコロナ禍の影響で家族の入室はお断りしている。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。（食事づくり、散歩、外出、行事等）	△	今年はコロナ禍の影響で家族の参加できる行事は一切実施していない。面会だけは制限付きで可能にしているので、交流だけは維持できている。	○		○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。（「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等）	◎	毎日ブログにて日々の様子をたくさんの写真とともに伝えるようにしている。月に一度はお便りも出している。	○		◎	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して報告を行っている。	△	変わったことがあれば家族に連絡するようにしているし、連絡をした際には思いなどを聞き取るようにはしているが、利用者によって頻度に差がある。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。（認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等）	○	年に数回しか来所できないご家族に対しては来所時、面会の最初は同席し、様子や変化をさりげなく伝えるとともに、会話のフォローなどをするようにしている。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。（行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等）	○	大きな変更を実施する場合は変更前に家族に報告するようにしている。また職員の退職なども月に一度のお便りで報告している。	◎		◎	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。（家族会、行事、旅行等への働きかけ）	×	今年は家族会の実施はできていない。				
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にした対応策を話し合っている。	◎	折々に話し合っている。				
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行っている。	△	不安定な利用者に関しては定期的に行っているが、安定しているご家族に対してはあまり行えていない。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	◎	契約締結時にかなり時間をかけて説明をしている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	退去については納得を得たうえで、転出先の調整もきちんと行いトラブルにならないようにしている。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。（食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等）	◎	契約締結時に説明し同意を得ている。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ.地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	◎	事業所の目的や役割を積極的に地域に説明してきたし、最近は地域の理解もしっかりと得られているように感じる。		○		コロナ禍以前は、利用者と一緒に運動会などの地域行事に参加したり、自治会の会合や清掃なども協力したりしている。管理者を含めて、ほとんどの職員が地元に住んでおり、顔見知りの地域住民も多い。お話しやさくらカフェなどの有償ボランティアの協力もあり、交流することも多い。さくらカフェを活用して、月1回さくら茶話会を開催しているほか、社協職員などと福祉交流会も開催することができている。また、事業所では、小学2年生の「町たんけん」に協力したり、中学生の頃からつながりのある高校生のボランティアを受け入れたりして、交流を深めている。さらに、保健センターへの行く時に地域住民が事業所へ立ち寄ってくれたり、野菜などの差し入れを持ってきてくれる住民も多い。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	◎	日常的な参加や清掃活動、自治会の会合への参加はもちろん、地域行事への参加も積極的に行っているし、認知症についての勉強会や地域向けのカフェの開催なども実施して地域との繋がりを作っている。		○	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	◎	よく声をかけてもらえるし、見守りも得られている。				
		d	地域の人が気軽に立ち寄ったり遊びに来たりしている。	◎	地域の人がよく利用者に会いにきてくれたり、保健センターに行く途中で利用者と立ち話をしたりしている。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	◎	地域の人がよく利用者に会いにきてくれたり、保健センターに行く途中で利用者と立ち話をしたりしている。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	◎	利用者の出掛け先の一つになっているさくらカフェはボランティアが運営してくれており、また同じ共有スペースを利用している子育て支援サロンや手芸部、絵画部がカフェの環境を整えたり交流をしたりと支えてくれている。				
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	◎	買い物などは快く受け入れてもらえているし、マスクの制作と販売では地域の物産センターや整骨院が販売に協力してくれており、地域の人が積極的に購入してくれたりしている。				
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	◎	積極的に出かけるようにしているし、地域の人に理解を得られるように情報発信にも力を入れている。				
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	今年はコロナ禍の影響で書類開催になった回もあるが、開催できたときには地域の方やご家族などいつも支援してくれている人達が参加してくれた。	○		○	今年に入り、運営推進会議はコロナ禍のため書面で開催することが続いていたが、訪問調査の当月には、集合形式で開催することができている。会議には、地域住民や民生委員、社協職員、小学校教諭、町担当者など、多くの参加を得て開催することができている。以前は、会議の開催日も参加メンバーが参加しやすい日を調整していたが、現在は奇数月の第2火曜日の開催に固定している。また、事業所として、外部向けの行事で「〇〇をしたい」という場合には、参加メンバーに住民への参加呼びかけや人材集めの協力も得ることができているほか、提案に対して、アイデアや開催方法などの視点を教えてもらうこともあり、事業所としても多くのメリットを得ることができている。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	◎	サービスの実際や地域に向けた取り組み、外部評価の結果と改善にむけた取り組みなどを報告している。また、今後に取り組みたいことなどについても地域の意見をもらっている。			◎	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	◎	運営推進会議で出た意見をうけて改善したり取り組んだりしたことや、その結果については次の運営推進会議で報告するようにしている。		○	◎	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	◎	メンバーは年度の初めに前年度の活動を参考にして委任し、なるべく全員が参加できる日程と時間帯で実施するようにしている。		○		
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	△	誰でも見られるようにしているが、議事録があるということを周知していないので公表しているとは言えない。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	◎	利用者が入所してからも地域から切り離されることなく、施設が利用者にとって安心して寛げる家となるように取り組んでいる。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	△	事あるごとに理念については伝えるようにしているが、まだまだ浸透しているとはいいがたい。	○	○		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	◎	今年はコロナ禍の影響で外部の研修は法定研修以外は受けることができなかったが、内部研修は毎月実施している。また外部研修についても受講しやすい仕組みを整えている。				週2回程度、代表者の来訪があり、利用者や職員の話しに耳を傾けてくれている。事業所では、月1回研修会を実施して、職員のスキルアップに努めているほか、外部研修にも参加することができる。管理者は、職員の退社のタイムカードを押す時に、「何か気になることはないか」などと声をかけ、職員の話しを聞くこともある。また、代表者や管理者、職員同士は話しやすい職場環境づくりができており、結果の有無は別にしても、代表者は職員の改善点などの意見に耳を傾けてくれることもあり、職員は快く感じている。さらに、事業所では職員の離職率も低い。
		b	管理者は、OJT（職場での実務を通して行う教育・訓練・学習）を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	スキルのある職員に技術の伝達を依頼したり、実際の現場で指摘した方が良いと思うことは指摘したり、職員間で改善できるような雰囲気づくりをしたりと工夫して取り組んでいるし、実際スキルアップしていると感じる。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	◎	職員の意見や改善案などは必ず検討して妥当であれば取り入れてくれるので風通しがよく、職員も意欲的に働ける仕組みができていると感じる。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。（事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加）	○	相互研修への参加を促したり、町内の他事業所への見学も調整するようにしている。今年は他施設への見学は行かれなかったが、社協のケアマネさんに講師をしてもらい家族支援についての研修を実施した。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	なるべく言いたいことは言える環境を作っているつもり。また、人間関係が円滑にいくように配慮もしている。	◎	○	◎	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	年に2回の研修を実施しているし、申し送りや日々のケアのなかでも機会があれば注意喚起を行っている。				月1回実施する研修会の中で、虐待防止などを年1回テーマに取り上げて職員は学んでいるほか、管理者は日々の申し送りなどを活用して、不適切なケアが起こらないよう、職員に注意喚起をしている。不適切なケアが見られた場合には、管理者等からその場で注意するほか、全体ミーティングなどを活用して、「なぜ起こったのか」を話し合い、未然の再発防止にも努めている。また、運営推進会議の中で、身体拘束適正化委員会から不適切な案件があれば報告をしているものの、職員が委員会の存在までの理解には及んでいない。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	毎日の申し送りの際に必ず話し合っているし、職員が仕事を終えて帰るときに気になることはないか声をかけて聞くようにしている。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見過ごされることがないよう注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	不適切なケアに繋がりそうなケアや声掛けについてはその場で注意をしたり、なぜ起こったのかを検討したりするようにして未然に手を打つようにしている。			○	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	◎	職員の話をきいたり、表情や様子は注意してみるようにしている。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	研修やミーティングなどで事あるごとに確認している。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	研修においては必ずしているし、ミーティングや申し送りでも懸念事案が上がる場合にはその場で話し合いをし、結果を上長報告している。				
		c	家族等から拘束や施錠の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	家族から拘束や施錠を要望されることはないが、もし要望されても事業所としての方針をしっかりと説明し納得してもらえるように話し合いをする。				

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	△	内部研修のなかで学習する機会を作っているが定着する頻度で研修はできていない。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	△	必要とあれば支援を実施するが、現状で該当する家族がいない。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関（社会福祉協議会、後見センター、司法書士等）との連携体制を築いている。	○	地域包括支援センターや社会福祉協議会とはこまめに連携し情報共有を行っている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	△	マニュアルを作成し、職員が自由にみられるところに配置してある。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	年に一回は応急手当、救命救急の講習を実施しており、これまでも救急の対応はしてきている。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一歩手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	△	事故報告、ヒヤリハットを作成することもあるが、作成せずに対応協議と周知に留まることもある。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	△	それぞれのリスクについては検討しており対応も取り決めているが時々おろそかになることもある。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	×	マニュアルは作っておらず、苦情を受けた場合は速やかに管理者に報告し、管理者が対応することとしている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	利用者、家族、地域からの苦情に対しては速やかに対応策を検討している。大きな苦情に関しては町に相談して助言を仰ぐこともある。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	対応が決定したらすぐに苦情を入れた方に連絡をとり、どう改善したか伝えるようにしている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。（法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等）	○	ケアプランを見直す際に思いや希望を聞き取るようにしている。また、表情が芳しくないと感じたときにはこまめに声をかけるようにしている。			○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見や要望を聞き、新たに知ることもある。家族からは、一部の面会は再開しているものの、時間に限りがあるため、電話連絡時などを活用して、管理者等は気軽に意見を伝えてもらえるよう努めている。また、管理者は、日々の退社時に職員に声をかけ、どんな小さいことでも聞き、職員は安心して帰宅している。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。（法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等）	○	契約の際に、要望や気になることなど気軽に問い合わせてもらうように連絡先を伝えている。また面会や電話などの機会があるときには要望などについて伺うようにしている。	○		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	△	遠方の家族や不安定な利用者の家族には管理者に直通の携帯電話の番号を伝えている。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	◎	代表者も夜勤を月に2度はしているし、週に1度は必ずフロアの様子を見に来て職員の要望や提案を聞いている。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	◎	職員の提案は必ず、妥当かどうかを検討するようにしている。提案を採用する場合は速やかに全体に周知しているようにも心掛けている。			◎	

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	サービス評価の評価項目を利用して職員のケアのセルフチェックをし、ケアについての自己覚知を促している。				外部評価の自己評価は、一部の項目を取り上げて職員のケアのセルフチェックとしても役立てているものの、現在管理者のみで作成しているため、職員の意見も取り入れながら自己評価を一緒に作成できることを期待したい。外部評価の結果は運営推進会議の中で報告するほか、全体ミーティングなどを活用して、全ての職員に周知している。また、会議の書面開催が続いていたこともあり、地域アンケートの結果からは、評価の内容が少し伝達できないないことを窺うことができる。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	◎	評価の結果はかならず職員会議・研修においてフィードバックし、対策を協議したり、ケアの変更を指示したりしている。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	◎	目標達成計画は評価結果がでたときに全職員に周知し、取り組みについて話し合うようにしている。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	評価の結果と目標達成計画、前年度の目標達成計画の達成度を運営推進会議で報告するようにしている。運営推進会議に地域包括支援センターや町の職員も参加しており、町や地域包括支援センターにも伝わっていることにしている。	○	△	○	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	前年度の目標達成計画の達成度を運営推進会議で報告するようにしている。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	○	マニュアルを作成し、火災想定、地震想定では実際にマニュアルを運用して避難訓練を実施している。				事業所では、利用者と一緒に火災や地震を想定した避難訓練を実施している。避難訓練の実施状況は、事業所便りを活用して家族に報告できているものの、利用者家族アンケート結果からは、全ての家族にまでは伝わっていないことを窺うことができるため、コロナ禍の収束後には家族会などを活用して報告したり、家族に訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、家族に理解が得られる取組みを期待したい。また、現在はコロナ過で実施されていないものの、地域の防災訓練にも参加協力をすることができている。さらに、運営推進会議の開催に合わせて、コロナ禍の感染症対策を含めた、大規模災害時のBCP（事業継続計画）訓練も実施している。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	△	夜勤帯を想定した訓練は実際に実施できていない。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	定期的に実施し、足りないものなどを適宜買い足したり、買い直したりしている。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	◎	地域の防災訓練にも参加しているし、今年は運営推進会議内で南海トラフ地震とコロナウイルス感染症を併せてBCP訓練を実施した。	×	△	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	○	地域の防災訓練にも参加しているし、今年は運営推進会議内で南海トラフ地震とコロナウイルス感染症を併せてBCP訓練を実施した。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	◎	月に一度、茶話会と称して認知症についての勉強会をしている。今年は包括支援センターが実施した認知症についてのパネル展示にも参加させてもらった。3か月に1度は地域向けに認知症について書いたチラシを新聞に折り込んでいる。またほぼ毎日、GHでの利用者の様子を写真付きでブログに掲載している。				事業所として、地域住民から相談があった場合には対応をしている。事業所では、年4回事業所便りを、新聞の折込チラシで地域住民に配布し、事業所の取組みを周知している。月1回、「さくらカフェ」を活用して、地域住民も参加できる「さくら茶話会（認知症カフェ）」を開催し、認知症をテーマに話し合ったり、相談支援をすることもできている。茶話会の参加者から、「別の場所でもさくらカフェを開催して欲しい」などの意見が出され、昨年10月から週1回、開発センターで地域住民も集える「さくら浜カフェ」を開催するようになっている。また、事業所として福祉交流会を実施し、社協職員などの参加を得て情報交換などはできているものの、町担当者の参加にまでは至っていない。さらに、小学生の「町たんけん」や高校生のボランティアの受け入れをしている。事業所では、町行政や地域包括支援センターとの連携も取れている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	◎	茶話会で相談を受けることもあるし、地域のひとが相談に来ることもある。適宜、相談に対応している。		×	○	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	◎	コロナ禍で事業所を解放するのは難しいが、テラスにて小学生の社会科授業を受け入れたり、運営しているさくらカフェで茶話会を開催したり、古民家を借りて週1回の地域の人のためのカフェを実施したりしている。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	◎	有償ボランティアを1日1人受け入れている。小学校や中学校の職業体験などの受け入れも実施している。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	○	地域の行事、イベントなどには積極的に参加させてもらっている。			○	